

任せていいの、小沢一郎に

す。

率直に言って、民主党のマニフェストは、大胆で新鮮です。外需に期待できない今の日本経済にとっては、内需刺激策としてみれば、きわめて効果的な景気対策ともいえます。

それにしてもやはり甘い話が並びすぎていますね。「一般会計と特別会計を合



決して忘れまい。 胡錦濤への露骨な追従を

計した二百十二兆円の一割を削減すれば、二十二兆円の財源ができる」といわれども私はよく理解できません。小沢さんだからこそ、国民に向かって少しは苦い話をされても説得力があるのではないか。とくに社会保障を語るときには消費税から逃げないでほしい。これまでの小沢さんは沢山味方を増や

したけれども敵もつくりました。政権に就けば、意見や立場の異なる人々の話にも耳を傾けなければなりません。私は最後に申し上げます。「政策は鋭く、大胆に！ 人間関係は円く、おおらかに！」巧言令色の政治集団は信頼できません。



なかじま ひでお
中嶋嶺雄
国際教養大学学長

忘れられない。

国際問題や日中関係、それに台湾問題などについて、政治家の方々と膝を詰めてお話しする機会も少なくはないのだが、小沢氏とはこれまでに一度もお会いしたことがない。そのような私が小沢氏についてコメントするのは控えるべきではあるが、「諸君」編集部求めでもあるので、若干の私見を述べさせていただく。まず私が小沢氏に強い印象を受けたのは、宮沢喜一氏が首相になるときのこと

であった。確か一九九一年の秋だったと思うが、当時の自民党の体質を象徴する権力者・金丸信氏に同行して北朝鮮を訪問したり、自民党の若い幹事長として羽振りを示したりしていた小沢氏が、自民党の総裁選候補者の宮沢氏、渡辺美智雄氏、三塚博氏という派閥領袖の三氏を彼の個人事務所呼びつけて、自派の総裁候補をもたなかった自民党経世会（竹下派）が三氏のうち誰を推薦するかを決めるための面談をおこなったテレビ画面が

その様子は、まるで小沢氏が最高権力者で、氏より年長の三人の政治家が家臣であって、まさに権力者が首実検を行っている感があった。いかに経世会が強い政治的影響力をもっているようとも、またいかなる理由が背後にあるうとも、「政治の尊厳」のためにも、このような場面を公衆の面前に示すことはあってはならないと私は思う。首相になった宮沢氏をはじめとする候補者も、あの「小沢面

接」のときのような卑屈な態度を示してまで総裁になろうとしたという点で、日本の政治史に一つの汚点を残したのであった。

このときの政治構図は、今日の民主党において、小沢氏君臨の下、菅直人、鳩山由紀夫、岡田克也、前原誠司氏が右から左へ横並びに配置させられているかのような図式と類似しているようにも思われる。

もう一つのきわめて大事な問題は、中国との関係である。四川大地震や北京五輪、中国の社会的・経済的危機と軍事力の増強、さらには今日も相次いでいる一連の中国産食品などの問題で、今日の中国問題がたんに日中関係のみならず、全世界的な「脅威」として存在しつつあることが明らかであるだけに、日本のリーダーや政治家は、中国についてのよほどしっかりした問題意識をもっていなければならない。

二〇〇六年十月の安倍晋三首相の電撃的な訪中が、日中間の「戦略的互惠関係」を固めることができたのは、安倍氏

なりの深謀遠慮が背景にあったからである。安倍氏を引き継いだ福田康夫首相の昨年十二月下旬の訪中は、靖国神社への参拝を拒んだ首相の公式訪問として、中国側の期待がきわめて大きかった。その期待にこたえて福田首相は、報道管制が厳しい中国で全国に放送された北京大学での講演で、日中間は「創造的パートナー」になるべきだと強調し、中国側に大歓迎されたのである。福田氏の場合には、確信的な中国傾斜と台湾問題について

はよかったといえよう。そして現在の麻生首相には、その短期間の外相時代と日台関係への永年の配慮からしても、かなり安心して日本外交を任せられるのではないか。

このこれまた確信的な冷淡さなしいは慎重姿勢という点で従来から一貫していた。それが福田氏一流の「ぼかし」で外郭がはつきり見えなかっただけである。だが皮肉にも、福田首相が訪中して胡錦濤主席と日中友好を称えあったその一ヶ月程のちに、例の「毒入りギョウザ」事件が表面化し、日本国民は今日の中国社会の危険な体質を肌で知らされたのであった。今年五月の胡錦濤訪日を、日本国民が素直に歓迎できなかったゆえんである。

このような態度を示した福田首相が退陣したのは、日本の対中外交という点で

しかし政局如何では小沢一郎・民主党代表に政権をゆだねることにもなりかねないとすれば、小沢氏の中国観や日中関係についての認識にも注意を払わなければならないであろう。そして、この点に関しては絶好の証明材料があるのである。それは小沢氏が昨年十二月初旬、国会開会中だというのに、何人かの民主党国会議員を引き連れて民間人や議員秘書らとともに訪中した「長城計画」という大規模代表団の中国での行状である。羽田孜氏や菅直人、山岡賢次、野田佳彦氏の民主党執行部の議員に田中真紀子議員らも加わった日中国交正常化三十五周年代表団一行は、十二月六日に北京入りして同日夜、李鉄映・全国人民代表大会副委員長の接見を受けた。

翌日は胡錦濤・国家主席兼中国共産党総書記との会談が北京の人民大会堂で行

われたのだが、会談に先立って胡主席は一行全員との記念写真に加わった。翌日の『人民日報』（十二月八日付け）は一面トップで胡錦濤・小沢会談を取り上げていたが、そこには「小沢一郎は胡錦濤が時間をやりくりして会談したことに感



遅すぎた最後の戦い。 彼に残された仕事はもうない



なかじひろしま
中西輝政
京都大学教授

小沢一郎という政治家のキャリアは大体、次の三つの時代に分けられるだろう。第一の時期は、昭和四十四（一九六九）年の初当選以来、自民党・田中派Ⅱ経世会の寵児として古い権力中枢の中で育っていった時代。次いで平成五（一九九三）年に自民党を飛び出し「新生党」を率いて反自民の細川連立政権を作り出し、その後、「新進党」、「自由党」と、次々と作っては壊し、の政党遍歴を繰り返していった十年間。そして第三期は平成十五（二〇〇三）年に鳩山・菅氏らの率いる民主党に合流し、その三年後に例

の「メール事件」で同党の党首の座に就き現在に至っている五年間の歩みである。

このようにして見ると、二十七歳の初当選から五十一歳の自民党離党の時まで、実に二十四年間つまり政治家としてのキャリアの大半を、「角栄・金丸の秘蔵っ子」として出世街道をひたすら邁進していた、無垢な権力政治家の道を辿っていたように見える。それが、不惑も過ぎ五十坂を越したところで、何を血迷ったか、突然「改革の政治家」に変身して、「壊し屋」の異名をもつとせず、

く、対中国低姿勢に徹したのであった。胡錦濤主席らの中国首脳に示したこのときの卑屈な「位負け外交」と媚態姿勢は、この一事をもって小沢氏には国を任せられないことを歴然とさせたのであった。

一代の風雲児となって、およそ十年にわたり日本政治を揺がし続ける。その拳句、「反小沢」をアイデンティティとして誕生した民主党に、文字通り「辞を低くして」何とか入党させて貰うということになる。以後、今日までの五年間は、あの代表就任の際の「謙虚になって」という言葉にあったように、ひたすら「耐える小沢」として宿願の達成つまり自民政権の打倒に向けて邁進してきたように見える。

これは一体、何なのだろう。そこに何か連続性があるとすれば、それは何か。

この政治家を見ると、そのことが常に脳裡から離れない疑問であり続けてきた。だから、昨年十一月あの「大連立騒動」を見せられたときは、正直言って安心したところがあった。「やっばり、これが小沢一郎の変らぬ本質だ」と思えたからである。もちろん、それまでも時々、「切れて」しまい菅・鳩山ら周囲を手こずらせることはあった。「まあ、小沢らしいな」と、そのたびに思いはしたが、権力の推移が関わる「大連立劇場」では、やはり重みが違った。政策と政治手法、そして人格、この三つは成熟した政治家においては、やはり一つの「全体」として出来上がったものがある。小沢の場合、そこに大きな分裂があるように見える。

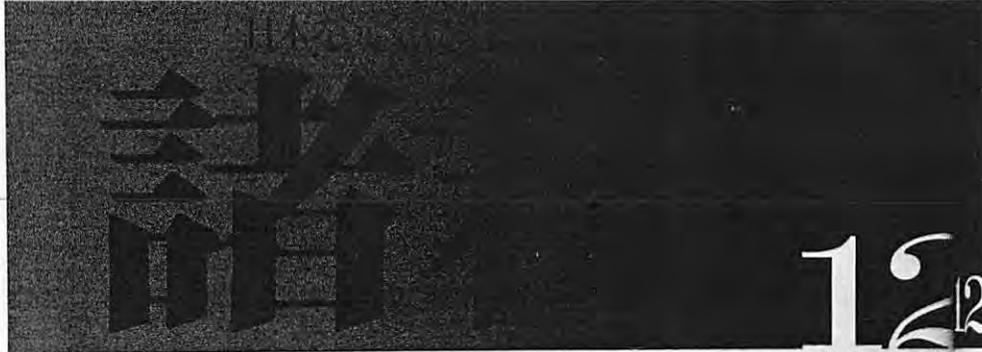
結局、小沢一郎をめぐる最大の疑問は、如何にして、又なにゆえに突然、「改革の政治家」への、あの転向が行われたのか、ということである。もちろん、保守の権化が急に進歩派の陣営に鞍替えする、などということは洋の東西を問わず政治の世界では珍しいことではな

い。英語では「クロッシング・ザ・フロアー」（通路を横切って反対側に走る）という常套語まである。しかも、小沢一郎は自民党を出るに際し、著書『日本改造計画』を世に問い明確な政策ビジョンを提示しているのだから、そこには決して「やましい」思惑などなかったことだろう。また、今では随分、奇矯な議論に聞えるようになったが小沢氏の例の「国連中心主義」も、湾岸戦争や細川・羽田政権の頃の日本では、むしろ多数派の意見だったのであり、何人もの東大教授や国際政治学者が小沢の下に馳せ参じお墨付きを与えていたものだ。つまり変わったのは世間の方で、小沢氏は一貫している、むしろ恐ろしく、一貫していると言うべきだろう。

そして前述した通り、「大連立騒動」時のやり方やその後の対応などを見て、例の「剛腕の密室政治」という手法や突如キレまくるあの性格も、結局、何ひとつ変っていないのではないか。そして何よりも、この十五年、自民党を政権から追い落としバラバラにしてしまうとい

う「執念」とも称される初志は貫き続けている。政治において、一貫性というのはしばしば高く評価される。なぜなら、それは政治の世界では明らかに稀少価値だからである。しかし、小沢一郎の一貫性は「日本人離れ」したものである。一貫性ということの中に日本人が見いだすものは、まず第一に「忠誠」という徳である。そしてそれは、具体的な人間やその集団への忠誠、つまり「人間の絆」への忠誠、これが最も高く評価される日本人の「一貫性の核心」にあるものだ。

しかし「和の文化」を否定する小沢一郎は、人への忠誠ではなく、政策や政治目標つまり「観念への忠誠」に生きる道を選んだ。党よりも政策という理想主義が、「壊し屋・小沢」を生んできた最大の要因だったのではないか。しかし小沢には、理想主義者に特有の「判断力の未熟さ」があり、それが繰り返される挫折を生んできた。「御輿は軽くてパーがよい」と言っただけの首相の反抗に遭い、下の



December

昭和44年8月2日創刊(郵便物認可)
平成20年12月1日発行(毎月1回1日発行)
第40巻第12号

38頭の馬が躍動する、音楽と舞台の熱狂的マリアージュ。これがジンガロの原点だ!

演目:「BATTUTA(バトウータ)」
作・演出:バルタバス
出演馬:38頭 出演者:35人

騎馬スペクタクル ジンガロ
新作「バトウータ」、待望の東京公演決定!!
2009.1.24(SAT) 3.26(THU)

本場公園内
ジンガロ特設シアター
東京都現代美術館となり

料金(税込み・全席指定) ギャロップシート18,000円 SS席20,000円 S席14,000円 A席8,000円
【平日】18:00開場/19:30開演 (土・日・祝日)15:30開場/17:00開演 月・木曜日休演(3月28日除く) 上演時間75分(休憩なし)
※未成年観覧の入場はお断りしております。車椅子の方は1〜3列目、最前列の馬場側に見られる前方満点のシートを、多少の移動が預みできる場合がございますので、ご了承の上お買い求めください。車椅子にて乗場されるお客様のご予約・お問い合わせは、チケットスペース 03-3234-9999にて承ります。

チケット 好評発売中

電子チケットびあ 0570-02-9999 (Pコード388-239) <http://pia.jp/zingaro/> (PC・携帯とも)
ローソンチケット 0570-000-407 (オペレーター対応) 0570-084-003 (Lコード34000)
イープラス <http://eplus.jp/zingaro/> (PC・携帯とも)
JTBエンタメチケットデスク 0570-03-0311 (SS席のみ/10:00~18:00)
※0570から始まる電話番号は一部の携帯電話・PHS・IP電話からはかかりません

ご予約・お問い合わせ **チケットスペース TEL 03-3234-9999**

【主催】ジンガロ日本公演実行委員会/テレビ朝日/朝日新聞社/TOKYO FM/びあ/カンパセーション/アミューズ
【共催】フランス大使館 【特別後援】東京都 【後援】外務省/農林水産省/江東区/日本中央競馬会/
地方競馬全国協会/日本馬術連盟/全国乗馬倶楽部振興協会/東京日仏学院
【特別協賛】エルメス 【協賛】日本シミュランタイヤ 【企画招聘】カンパセーション/アミューズ

18.2.28 150周年
テレビ朝日開局50周年記念
HERMES **ジンガロ**

「ジンガロ」日本公演
オフィシャルサイト
<http://www.zingaro.jp>

諸君! (第40巻 第12号)

定価六八〇円 本体六四八円

特集 任せていいのか、

特集 任せて

いいのか、

小沢一郎に



岡崎久彦/海部俊樹/佐々淳行/武村正義/中嶋嶺雄
中西輝政/羽田孜/平野貞夫/筆坂秀世/山本卓貞/屋山太郎

さらばウォール街!

不死鳥・日本経済が

翼を広げるとき ●田村秀男

まやかしの「A級戦犯・分祀論」に、終止符を打て ●渡部昇一

雑誌ジャーナリズムよ、

衰退の根源を直視せよ ●西尾幹一

